文化

国造りの意志 藤原京に見る

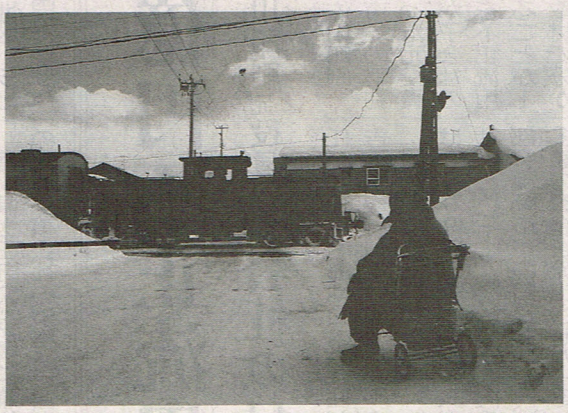
謎多い全貌、解明へ一歩

奈良県橿原市の藤原京（694～710年）跡で、新たな発見が相次いでいる。都が置かれたのは古代の律令国家が形成されつつあった重要な時期。その姿はいまだ謎が多いが、当時の建造物や宮殿の瓦を焼いた窯などの遺構からは、新たな国の形を目指す強い意志が伝わってくる。

藤原京は、平城京や平安京より先に造営された日本初の本格的な都城（碁盤の目状の街区を持つ古代中国式の都市）だ。その中心に位置した藤原宮跡で見つかった建物跡が注目を集めている。発見地点は天皇が重要な儀式に出御した大極殿の約250㍍東。2012年から14年にかけて直径1・2～2㍍の主穴跡が10

周辺地区で発見

実はこの遺構、藤原宮内に位置するが、天皇が居住した「内裏」や大極殿のある「大極殿院」、



©立木義浩

立木義浩作品展「北へ」（31日まで、半蔵門・JCIIフォトサロン）より

のは、柱材の下に礎石を据えた「礎石建物」だった点だ。当時、建物のほとんどは地面に掘った穴に柱を立てる「掘立柱建物」。礎石建物は宮殿や寺院などに限られる。

た中枢からは外れた場所にある。藤原京で、中枢ではない所から礎石建物跡が見つかったのは初めてだ。

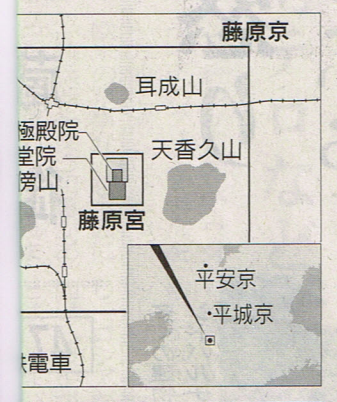
何の建物だったのか。格子状に柱を配置する「総柱構造」だったことも謎を深めている。この構造を多用した「高床式倉庫」または「望楼」と

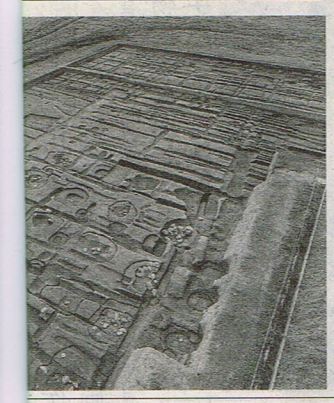
する説、「床を張った皇族の屋敷だった」との説。研究者からはさまざまな見方が出ている。

奈良文化財研究所の西山和宏主任研究員は「当時の様子が徐々に分かりつつある藤原宮の中枢に比べ、周辺地区は不明な点が多い。今回見つかった遺構の解明は全貌解明への重要な一歩になる」と話す。

藤原京は694年、飛鳥浄御原宮から遷された。従来、天皇が代替わりする度に新たな宮が建造されていたが、藤原京は持統、文武、元明という3代の天皇が都とした。ただ造営の過程や、わずか16年で平城京へ遷都した理由など多くがいまだ謎とされる。

京の範囲についても長年議論があり、かつては大和三山（耳成山、畝傍山、天香久山）の内側の東西1・1キロ、南北3・2キロ程度と考えられていた。一帯の発掘で東西に走っていた道路跡などが見つかり、今は東西5・3キロ、南北4・8～5・





3キロに及んでいたとの見方が有力になっている。

広大な京域全体で発掘された地区は約2割にすぎないが、現在も活発な調査が続き、次々と新発見が報じられている。

大極殿院付近では13年、柱穴跡が東西約54㍍にわたって3㍍間隔で並んでいるのが見つかった。儀式に使う旗ざおや幕の柱などを立てた跡とみられる。宮殿前ではためく色とりどりの旗や幕。宮殿の姿をうかがい知る重要な発見となった。

この付近では古墳を壊して宮殿などを建てた痕跡も昨年発見された。直径12～15㍍の円墳の墳丘を削って平らにし、石敷きの広場を整備したらしい。藤原宮は大和三山に囲まれた景勝地。「新たな宮を造るのはここだ、という強い意欲があったのだろう」と西山さん。

京域の南限近くで昨年見つかったのは東西約51㍍、南北約6㍍の大型建物跡。宮外では最大規模という。「多くの役人が詰めた公的施設だったのでは」と奈良県立橿原考古学研究所の宮原晋一調査部長は見る。

藤原宮から南へ約8キロの丘陵（奈良県高取町）でも昨年、大極殿などの瓦を焼いたとみられる窯跡が見つかった。斜面に造られた登り窯で、たき口や燃焼室、焼成室、煙道などを確認。内部から藤原宮の瓦が大量に出土した。1度に500枚程度を焼いたらしい。

初の瓦ぶき宮殿

藤原宮全体では200万枚以上の瓦を必要とし、滋賀や兵庫、香川などでも生産したと推察されている。その中で最大の産地は現在の高取町だったと考えられている。

これより前の時代では瓦は寺院に限定されており、藤原宮は日本内では初めて瓦がふかれた宮殿とされる。「一帯は広大な工房地区だったとみられる。中国風の瓦ぶきの宮殿に、律令国家形成の決意を込めたのでは」と高取町教育委員会の木場幸弘文化財担当は話す。

藤原京の歴史に詳しい木下正史・東京学芸大学名誉教授（考古学）は「本格的な律令国家への出発点に位置付けられる藤原京がなければ、平城京も平安京も存在しなかった。全貌解明への道はまだまだ長いが、日本史を塗り替える発見も期待できる」と力説する。

（大阪・文化担当　田村広済）

文化往来

アベノミクス「後見人」が自作曲CD

アベノミクスの理論的支柱の経済学博士は作曲家でもあった。内閣官房参与で米エール大学名誉教授の浜田宏一氏（79）は来年1月、歌曲などの自作を20曲以上収めたCDを出す。音楽プロデューサーの中野雄氏が制作を担当する。

今年8月2日には長野・松本市音楽文化ホールでの「心と体を健やかにする音楽セラピーコンサート」で新作「ワルツ信濃のせせらぎ」（仮題）が初演される。「小学生の頃から北原白秋の詩などに曲を付けてきた。中野さんとの出会いを通じて自作が世に出るのはうれしい」と語る。

「両親が音楽好きで、山田耕筰の本や通信教育を通じて作曲を勉強した」。東大在学中には応援歌「美しく夜は明けて」が校内の作曲懸賞に当選した。作品は童謡や合唱曲、賛美歌、バイオリンとピアノのための曲など。「情景が浮かんでくる詩に曲を付けたくなる」。ピアノの吉武雅子氏、バイオリンの瀬川祥子氏らが録音する。

「複雑な無調作品を書こうとした時期もある」と話すが、親しみやすい旋律の曲が多いようだ。米国で気分がすぐれないと「ニューヨークのメトロポリタン歌劇場に通った。音楽をやるときには経済のことを忘れる。頭が新鮮になる」。経済学研究の傍らで書きためてきた楽曲が日の目を見る。

交遊抄

「短歌絶叫コンサート」の創始者で、歌誌「月光」の主宰。そうかと思えばテレビドキュメントのナレーターや大

『ド・一九六六年二月』が贈られてきた。題から推し量れる如く、学園紛争をテーマにした歌集である。思えば、そんな時代だった。

私が学生生活を始めた